

海からの大山道が柳島湊にあった

伊沢 千代子 記 2023.10.20



旧藤間家住宅

江戸時代の庶民は街道が整備されたこともあり手軽に大山参りをしていました。大山に行くには様々なルートがありますが、陸路だけではなく海路を利用して房総、伊豆からも多くの庶民が講を組んで大山を目指しました。今回は、茅ヶ崎市と平塚市に流れる相模川の河口にある柳島湊からの大山道を歩きました。

10月20日茅ヶ崎駅に予定時刻より早めに集合した会員41名は、浜見平団地行きのバスに乗り込み、終点で下車、国道134号線沿いにある柳島記念館にいきました。そこで“柳島いま、むかし会”の会員の方からの説明がありました。現在の相模川は（河口付近は馬入川とも呼ばれる）、流れを大きく変え、現在より東の方を流れ千の川、小出川、松尾川が複雑に流入して柳島村周辺は湿地帯だった、と当時の絵図を使って話してくださいました。厚木の奥から木材や炭などが筏や船を使って、柳島に運び江戸からきた船から生活必需品を交換して、柳島湊は川と海を繋ぐ重要な場所だったことがわかりました。ウナギ取り、蓑、半纏などの生活に使われた物や手書きの絵から賑わった様子が目に浮かぶようでした。

その後、柳島湊の船着き場だったと想定されるポンプ場や現在運動公園や畑になっている場所を左に見て歩くと、快晴のなか富士山、箱根外輪山や大山が見られ、江戸時代大山参りをした人々のうきうきした気持ちや貴重な南湖の左富士を体験できました。

柳島村の名主であった藤間柳庵邸跡では、神奈川100人に選ばれた彼の足跡や主のなくなった歴史ある庭や建物の説明を詳しく解説していただきました。ここは金、土しか見学ができないのですが、当日は私たちのため、西洋館は特別にガラス戸を開き、玄関を開けて中をみることができました。柳島周辺は関東大震災で甚大な被害を受け、柳庵邸も全壊してその後建てられるまでの仮屋や廻船に使われた錆びた碇、江戸時代の袴や藤間家の紋章のついた壺など普段は見られない貴重なものをみることができました。国登録有形文化財になっている「藤間家住宅主屋」は昭和7年の建築ですが、建築家の西村伊作の建築物が現存しているのは希少なものであるため、全国から見学者が多く訪れるとのことでした。ガイドから大正モダンボーイの彼の写真が見せられたとき、一同感嘆の声が出るほどのイケメンでした。



庭には廻船の帆ほどの高さの大きなニッキの木、樹齢を重ねた金木犀やタブノキなどが茂り草や花などは近所のボランティアの方のご厚意で、主が生活されているほどの風情がただよっていました。上総掘で噴出した水を利用し村民に温泉業の仕事を与えたり、飢饉のときは蔵から備蓄米を配給したり、柳庵は柳島の村民から慕われる名主だったようです。

柳島村の鎮守であった八幡宮では関東大震災で倒壊した神社の鳥居や藤間柳庵の記念碑をみて関東大震災

で700年ぶりに地下から現れた相模川橋脚跡を見学してから今宿に向かいました。今宿は東海道に面し八王子街道の起点だったので大いに賑わいました。

今宿バス停で一次解散し、浜降祭の起点となる松尾大神を参詣してから解散しました。天気に恵まれ、解説員とも交流もあり、各大変充実したさがみ探訪でした。（参加者41名）



旧相模川橋脚跡



柳島八幡宮